

君が代

2020. 10. 20

以前、イタリアにいたことがある。永遠の都ローマに3年間住んでいた。そのときにわかったこと、考えさせられたことがある。その一つに、「自分は日本のことを何もわかっていない」ということがあった。

皆さんは、なぜ日本の国旗が「日の丸」なのか。なぜ日本の国家が「君が代」なのか、ご存じであろうか。意外と誰も教えてくれないし、自分で調べようとしない限り、わからないままなのではなかろうか。

異国の地にいると、自分の国、日本のことを考えるようになる。あまりにも自分の国のことを知らない自分に気づかされ愕然とする。焦燥感にかられるほどである。

コロナ禍の中であって、日本人自身が、日本の真価に気づき、自身と誇りを持つことは必要なことのように思える。日本の歴史、日本の美という観点から、国歌である「君が代」を見てみたい。

君が代の起源を辿ると、その最も古い形は、『古今和歌集』の賀歌（祝賀の際に歌う歌）の部のはじめに、「題しらず よみ人しらず」として掲げられた次の歌であるという。

我君はちよにやちよにさざれいしの巖（いわお）と成て苔（こけ）のむすまで よみ人しらず

ということは、古今集が編まれるそのずっと以前から人々の間に歌い継がれてきたわけである。ざっと1200年ぐらい前の歌と考えられるだろう。

国学者の本居宣長は『古今集遠鏡』において、この歌を次の平易な言葉に訳している。

コマカイ石が大キナ岩ホトナツテ苔ノハエルマデ
千年モ万年モ御繁昌デオイデナサレコチノ君ハ

本居宣長のいう「コチノ君」とは、祝賀を受ける席の主賓を指し、天皇ただ一人を意味しているわけではない。

これが江戸時代に入ると、流行り唄「隆達節」の次の歌詞となった。

君が代は千代に八千代にさざれ石のいわおとなりて苔のむすまで

「君」は婚礼では新郎を指すなど、祝賀の宴の主賓に向けられた寿歌（ほぎうた）として広く庶民に歌われてきた。さらに、この歌詞は全国へと普及して、薩摩の琵琶（びわ）歌「蓬莱（ほうらい）曲」の中にも取り入れられることになる。

そして明治2年、イギリスの軍楽隊長の「外国の国々には必ず国歌というものがある。日本にも国歌を制定する必要がある」という進言を耳にした薩摩藩砲兵隊長の大山弥助（後の大山巖陸軍元帥）が、「それを新たに作るよりも、古くから庶民に歌い継がれてきたもののほうがいいのではないか」と考え、「君が代」の歌詞が国歌として選定された。

日本の国歌である「君が代」は、実に1200年以上もの歴史を有し、庶民に歌い継がれてきた歌だったのである。そう考えると、今までとは「君が代」に対するスタンスが変わってくるかもしれない。何事も、そうなった背景や経緯を知っておくことは重要なことである。